
CAGE - 籠の中の記憶探偵 - 《事件編》

白城海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CAGE - 籠の中の記憶探偵 - 《事件編》

【Nコード】

N5490Z

【作者名】

白城海

【あらすじ】

「何を言ってるか分からないと思うが俺にも分からない

《電車を待っていたら突然ホームから突き落とされた》」

馬鹿な友人、イカれた後輩と過ごす《日常》に突然現れた《非日常》俺には、命を狙われるような《理由》も《富》も《特殊能力》も《秘密》も何もない。

必死に訴えても話を聞いてくれない警察、大人たち。

そして激しさを増す襲撃。ついに、大切な友人までもが巻き込まれ、傷つく。

血に染まった友人を見て、俺は決意する。

「犯人をこの手で捕まえる」と。

自称高校生探偵、邪鬼眼持ちの後輩、甘ったれの妹、クールなお嬢様。

一癖も二癖もあるヒロイン達と、《見えない犯人》の織りなす学園バトル・ミステリ。開幕！

プレ中編、学園コメディの《日常編》>><http://ncod.e.syosetu.com/n9023y/>

序 犯人の独白 (前書き)

籠の中の記憶探偵《事件編》は日常編の続きではありませんが、独立した長編としてもお楽しみいただけます。

長さは厚めの文庫本一冊程度を予定。

よければ最後までお付き合いください。

学園コメディ《日常編》

<http://ncode.syosetu.com/n9023>

y /

序 犯人の独白

《力が欲しい》

あなたは、そう思った事はある？
他人には無い、自分だけの《特別な力》。
誰にも踏み込ませず、誰にも汚されることのない、無敵で、最強
で、醜悪で、最高に美しい力。

私は、持っている。
生まれついて、持っている。

この力があれば、どんな物でも手に入る。何だってできる。
富も、羨望も、嫉妬も、敬意も、畏怖も、暴力でさえも、望めば
簡単に手に入る。

私には、不可能はない。私は全能なの。
何でもできる。何だってできる。

例えば 人を《殺させる事》も。
例えば 殺人罪を、他人になすりつけることさえも。

私には出来る。私に不可能はない。

この物語は《狩り》の物語。

私の《罪》の証拠を握ってしまった男の物語。

愚かで、哀れで、何も持たず、戦う術も知らない哀れな男が
全てを持つ私に破滅させられる物語。

そこにはドラマもミステリも何も必要ない。ただの処刑劇場。だって、私は全能なのだから。無敵なのだから。全てを持っているのだから。

私は手を下さない。私は何も知らない。私は罪を負わない。彼を殺すのは、私の《手足》。忠実で、従順で、律儀で、約束を違えない、最高の《手足》。

籠の中の小鳥に逃げ道はない。

そう、《天海慶次》あまみけいじ

あなたには、死んでもらう。

1・日常の終わり

ふわり、と。宙に舞う感触がした。

「えっ？」

午後六時半。ラッシュを迎えた駅のホーム。
俺はそこにいた。いたはずだった。

なのに、どうして

どうして、俺は宙に浮いているのだ。

どうして、目の前に電車が迫って来ているのだ。

俺の瞳に映るのは、鋼鉄はがねの処刑具。

いや、処刑具なんて生易しいものではない。

眩いライト。

がたがたと車輪とレールの擦れる音。

高速で襲い来る巨大な鉄塊。

電車。

数秒も待たずに俺は地面へと落ちるだろう。

そして、次の瞬間に五体は寸断され、臓器と脳漿を飛び散らし、
物言わぬ肉塊になるに違いない。

死ぬ。俺が、死ぬ。

視界が灰色へと変わる。

世界がスローモーションに見える。

今まで生きてきた中の《記憶》がフラッシュバックする。

穏やかだった幼い頃。
優しい兄、甘えん坊の妹。
多忙ながらも愛情を注いでくれた両親。

突然終わった穏やかな日々。

鼻をつく消毒液の香り。白い部屋。ベッド。病室。
交通事故に遭ったと聞かされた事。

《記憶障害》を負ってしまった事。

もう、二度と穏やかな日々は戻って来ない事。

穏やかな日々は終わってしまったが、騒がしい日常が始まる。
《障害》を負ってもなお付き合いを続けてくれる気のいい友人。変
わり者の後輩。

学校へ行き、他愛のない話をし、笑い、楽器を演奏する日々。

そして今、全てが終わりを迎えようとしている。

どうして、俺だけ。どうして、俺ばかり。

神様とやらがいるなら心の底から憎悪をぶつけてやりたい。

ゆっくりとゆっくりと進んでいく世界の中、俺の胸にはただ、怒
りが燃えていた。

.....

《見えない敵と命の危機》

六月十八日 午後零時四十分（六時間前）
私立平坂高校 中庭

「甘いわね慶次^{ケイジ}！探偵から逃げられると思ったの？」

昼休みの中庭に、やたらと良く通る声が響いた。

俺は驚かない。もう慣れた。

こんな事を言う生徒は一人しかない。

食べかけのパンを無理矢理牛乳で流し込み、声の方を見る。

視線を向けた先には、予想通りの女。

中肉中背。化粧気の無い顔立ち。猫を思わせる特徴的な瞳。外側に

跳ねたセミロングの黒髪。

人前では認めたくない友人、風間^{かざまきい}祈衣だ。

思わずため息が漏れる。

「うるさい。エセ探偵。俺の孤独のグルメを邪魔するな。放っておいてくれ」

風間は探偵を自称する変人だ。

事実、学校内の話題に関しては探偵の名に恥じない程の情報収集能力を持っている。

俺から言わせてもらえば探偵と言うよりはゴシップ記事かワイドショーのようなものだが。

ちなみに、一応幼馴染らしい。正直、認めたくない。

「グルメって…コンビニのコロッケパンじゃない。栄養偏るわよ？」
「そうだよ。天海先輩。よければ僕がお弁当を作るけど？」

突然聞こえた後ろからの声。

振り向くとこちらも見慣れた顔。

ぶかつ
音楽部の後輩、黒川^{くろかわあやは}絢葉。

俺に一目惚れしたと言い、突然入部した妙な少女だ。

小柄で色白。眼鏡の下に輝く、硝子のように透き通ったブラウンの瞳。光の加減によってはアッシュブロンドにさえ見えてしまうほどに繊維の細い髪の毛。まるで職人の魂が込められたフランス人形のような少女。

黙っていれば目を見張る美少女なのだが、性格に大きく問題があるのが難点。

具体的に何が問題かと言えば、《付き纏ってくる》。《気づけば俺の背後にいる》。

まるでストーカーか忍者。

悪意も被害もないのが逆にタチが悪いと言える。

「…ったく」

静かな昼食を邪魔した友人たちに向かい、頭を抱え、文句を言う。

「メシくらい静かに食わせてくれよ。あと、黒川^{クロ}。お前はせめて食えるモノを作ってから弁当って単語を発しろ。頼むから」

「それはまるで、僕が料理が出来ないみたいじゃないか」

「事実だろ。この前持ってきた、《調理実習で作ったクッキー》がただの炭だった事、忘れてないだろうな」

「ううっ」

急所を突かれ、黒川が黙る。

その姿を見て嘆息する俺。今日は一人になりたくて隠れていたのに台無しだった。

そもそも、どうやって俺を探し当てたと言うのだろう。

俺達の通う平坂高校は、生徒数三千人の大型校。人間一人探すのも簡単ではないはずだ。

「ったく。ストーリーカーかお前らは」

「これが探偵の力よ」

黙れ自称探偵。俺はお前を探偵と認めない。

世界中の誰もがお前を探偵と認めようと俺だけは認めるものか。

「違うよ。先輩たちは探偵じゃなくて、秘められた《能力》チカラに覚醒する《決意の騎士》なんだから」

そして黒川は高校生なんだから、中二病は卒業しなさい。どこの邪鬼眼使いだ。お前は。

「ってか、何の用だよ」

これ以上こいつらのノリに付き合っているのは昼休みが終わってしまふ。

無駄話を切り上げ、話を聞く事にする。

「いや、特に用は無いんだけど」

「天海先輩ウオツチング？」

無いのかよ。そしてウオツチングって何だ。俺は鳥か獣か何かか？何なんだよお前ら。

「だったら一人にしてくれ」

迷惑な友人たちとの騒がしいやり取り。これが俺の日常。

いつもなら馬鹿騒ぎに加わっている所だが、今日は勝手が違った。昨日の夜からの出来事を思い返すと、とてもじゃないが笑う気分にはなれない。

あまりにも《色々と起きすぎている》のだ。

「悪い。ちよつと疲れてるんだよ」

「疲れてるから来たのよ。その顔、何かあったでしょ？」

「僕たちに隠し事は無駄だよ、先輩」

「うっ…」

今度は、俺が黙る番。

変人だが、鋭い。どうやら心配させてしまっていたようだ。妙に気恥ずかしい気持ちになってしまう。

「一人で抱え込んで仕方がないじゃない。一体どうしたの」「どうしたって言われても、俺にも分からないんだよ」

観念して、《色々と起きすぎている》事を語る事にする。

恐らく、黙っていれば余計に不安にさせるだけだ。

お人好しの友人たちは、俺が何も言わずに抱え込んでいれば自分で動き出すことだろう。

例え、それが原因でトラブルに巻き込まれると分かっていたとしても、だ。

本当に、昨夜から訳の分からない事ばかりだった。

昨夜、俺は強盗に襲われた。

コンビニへ行く途中、人気のない河川敷で覆面をした複数人の男に囲まれ、刃物で脅されたのだ。

幸い、上手く逃げる事に成功し怪我もなく金品も奪われなかったのだが

「じゃあ良かったじゃない。怪我が無いなら何よりよ」

「先輩は警察に行ったの？」

「行ったけど、『パトロールを強化します』で終わりだった。どうも、被害が無いと警察ってのは動かないらしい」

「そうね。数日、警戒の強化は続くかもだけど、いるかないか分からない強盗に人員は回せないもん」

風間の言う通りだ。強盗未遂より解決しなければいけない事件は世の中に山ほどある。

誰も傷つける事ができず、何も奪う事が出来なかった間抜けな強

盗の為に割く労力は多くはないだろう。

「だろうな。俺だってそう思う。登校中は警官が多かったし、俺も不満はないさ。だけど」

それだけではなかったのだ。

強盗たちを撒き、警察に通報し、交番で聴取。

疲れきって帰宅する途中に、《それ》はやってきた。

住宅街の狭い路地。

突然、目を焼くヘッドライト。

一方通行を猛スピードで逆走するバイク。

いたずらなのか、殺意があったのか、それともただの暴走車なのかは分からない。

ただ一つ確実なのは、避けることができなったら死んでいた事。一瞬でも飛ぶのが遅れていたら、俺はここに立っていないと言う事。

「それ、本当？」

信じられない、と言った表情の風間。

目を見開き、手を口に当てている。

「嘘を言っただろうするんだよ。マジで死ぬかと思ったんだ」

思い出すだけで体が震えそうになる。

凶暴なエンジン音、タイヤが地面を擦る音、獲物を狙う獣の瞳のようなヘッドライト。

闇の中のため犯人の顔も見えず、ナンバープレートも確認する前に逃げられてしまった。

「これは事件の予感ね。今度こそあたしの…高校生探偵の出番よっ。二週間前の《死体遺棄事件》のリベンジよっ！」

「僕も手伝うよ。天海先輩を傷つけるなんて、ゆるせない。僕の黒魔法で呪ってやるんだから」

「茶化すなよ。そもそも事件って決まった訳じゃないだろ」

何故か抱きついてきた黒川の腕を振りほどきながら諭す。

そもそも、俺の命が狙われる理由が無い。

殺されるような恨みを買った記憶はないし、金を持つてる訳でも無い。

何かとてつもない秘密を知っている訳でも無ければ、隠された《能力》なんて馬鹿馬鹿しい物も存在しない。

命を狙われていると考えるくらいなら、宝くじが当たるくらいの確率を引いたと考える方がまだ自然だった。

「本当にそう思ってる？」

俺の心の中を見透かしたかのように風間が問いかける。

彼女は顔を上げ、俺の目をじっと見据えていた。

「風間先輩の言う通りだよ。天海先輩の《記憶障害》なら、知らない間に命を狙われていてもおかしくないんだから」

《記憶障害》。八か月前の交通事故で負ってしまった頭の傷があった場所をさする。

既に表面上の傷は完全に消えているが、俺の《頭の中》には消えない《障害》が残っている。

日常生活を送る事に不便はあるが、どうしようもないと言っほどではないのが救いかもしれない。

それに、例え障害が残っていても、この迷惑な友人たちと送る騒がしい日常があれば不満はない。心からそう思う。

…とてもじゃないが面と向かって本人たちには言えないが。

「とにかく一回、ちゃんと調べてみようよ。何かわかるかもしれない」
黒川が言葉を言い終える事は出来なかった。

「っ！」

影がかすめた。

直後、何かが割れる音。

日常が赤く染まった。

手にしていた牛乳パックを取り落してしまったほどの衝撃。
信じられない光景。

俺達はたった今、中庭でお喋りをしていただけの筈だ。

ほんの数秒前まで、黒川は俺に抱きついて笑顔を見せていた筈だ。
なのに、何故。

《何故黒川は血まみれになって蹲っているんだ》。

《何故俺の制服は黒川の血で赤く染まっているんだ》。

俺の足元には砕けた硝子製の植木鉢。

周囲に散らばるのは、砕け、飛び散った硝子片。

そして、植えられていたガーベラの花。

赤い花弁が鮮血で上塗りされ、赤黒い輝きを放っている。

数秒前を思い返す。

俺の鼻先をかすめていった影。

一瞬の風圧。

そして、ガラスが砕ける音。

間違いない。

《この植木鉢は上から降ってきた》

「誰だッ!!」

上を向き叫ぶ。

だが

俺の叫びに答える者は、何処にもいない。

耳に入るのは、騒ぎを聞きつけて集まった野次馬が放つ雑音。
そして、黒川絢葉の痛みに呻く悲痛な声だけだった。

1・日常の終わり（後書き）

事件編、開始。

初見の方でもわかるように書いていくつもり。

コンゴトモヨロシク

2・走馬灯 現実

頭が真っ白になったのは一瞬だけだった。

呆然としてる場合か。

違うだろう。

頭の芯から、俺の心の一番奥から、俺が俺である為の部分に嘔吐。目の前で大切な友人が蹲っている。血を流している。苦痛の呻きを上げている。

ならば、俺がする事は一つしか無いじゃないか、と。

「風間。救急車だっ」

「…う、うん！」

立ち尽くす風間の背中を叩き、指示を出す。

血なら嫌と言うほど見慣れている。ほとんどは俺が巻き込まれたケンカによるものだが。

そして、俺の兄は大学病院で医師の仕事をしている。

幸運な事に、俺は兄から応急処置の知識も教わっていた。

大丈夫。俺なら できる。

風間が携帯電話を取り出すのを確認し、黒川の傷の具合を見る。

左肘の内側。大きな血管が通る場所が、横にぱっくりと裂けていた。傷口からはどくどくと止めどなく血液が流れ出ている。これほどの出血は今までに見た事が無かった。

「だけど、大丈夫だ。このくらいなら」

自分の腰のベルトに手を伸ばし、外す。

運がいい事に、今日は皮では無く布ベルト。布ならば《きつく縛

る事が出来る》。

人間は体重の一割の血液を失えば体調に支障をきたし、三割で生命の危機に陥ると言う。

本当に危険な出血は、心臓の鼓動に合わせて噴水のように噴出す出血だ。

黒川の怪我はそこまで深刻ではない。もちろん放置すれば危険には違いないが。

服に血がつくことなど気にせず、ベルトで左脇を縛る。

間接圧迫止血。左腕に行く血液の量を減らし、出血を抑える。

後は傷口を覆う事が出来ればいいのだが…。

周囲を見渡す。

生憎、知り合いの顔は無い。当然だ。俺はダブリの三年。

しかも《事故》のせいで人付き合いを極力控えているのだから。

目に入るのは遠巻きに見ている興味本位の野次馬ばかり。役に立つとは思えない。

俺自身の無力さに歯噛みする。だが

「に、兄さん。どうしたんですか!？」

偶然だった。

妹 天海美鳥^{みどり}が近づいてくる。

目を見開き、驚いた表情。長い黒髪を揺らす姿は怯える小動物のようだ。

「ちようどいい。清潔なタオルを持ってないか？」

確か、美鳥の午後の授業は水泳。妹なら持っている可能性がある

と思い、問うが

「すみません。タオル…教室です」

「…だよな」

当然の答え。常に鞆を持ち歩いている訳が無い。当たり前的事に考えが及ばない。動揺している。

「クソッ！おいつ、誰かタオルは持ってないかつ！清潔な奴だっ

！」

野次馬に向け、叫ぶ。祈りを、願いを、思いを込めた叫び。だが、野次馬はお互いの目を合わせるだけで答えは返ってこない。ふざけている。どうかしている。

「返事くらいしろよっ！女の子が血まみれなんだぞ！？」
先ほどまでの溢れるような出血ではないが、黒川の腕からは未だにじくじくと血が流れている。

ただでさえ白い顔は、病的なまでに青白く染まり瞳は涙で潤んでいる。

「何でだよ……。どうして無関係でいられるんだよ！」

怪我人の前で苛立ちを見せる事は良くない事だと聞いてはいたが、俺にはどうしても感情を抑える事が出来なかった。

このまま保健室に連れていくか？と自問。

答えは、NO。保健室まで百数十メートル。

血を垂れ流す黒川を歩かせたくはない。

動けば血管の活動が活発になり、出血が増える。

それでも、このまま放置するわけにはいかない。

「クソつたれ！クロ、ちょっと待ってる。すぐにタオル取ってくるから！」

黒川は無傷の右手で俺の制服のベストを力なく掴んでいる。

不安なのだろう、痛みが。恐ろしいのだろう、生まれて初めての出血量が。

制服を掴む手を優しく引きはがし、立ちあがったその瞬間、

「どけっ！有象無象の役立たずども」

凜とした女の声が校舎の隙間に響き渡った。

気高く鳴り響く声は、まるで夜闇を切り裂く稲妻。

独善的と言えるほどに強く、逆らう事を許さないほどに鋭い。

声に込められた感情は《怒り》。他人に無関心な野次馬に、見て

いるだけの役立たず達に向けられた怒りだ。

声の出所は後ろから。

振り返っている場合では無い。そんな暇はない。なのに、俺は見てしまった。

《彼女》の声に宿る余りの強さに、怒りに引き寄せられるように。

「!」

野次馬の壁が、まるでモーゼの逸話のように割かれている。

その中心に《彼女》はいた。

まず目に入ったのは純白のタオル。俺が今、何よりも求めている物。

タオルを掲げた長身の女生徒がそこに立っていた。

長い長い金髪をはためかせ、青い瞳で真っ直ぐに俺を見つめている。

気高く、美しいその姿は、雪山にたつた一匹ひとひ残された白狼。

一瞬 ほんの一瞬ではあるが状況を忘れ、見とれてしまった。

「これを使いなさい。清潔さは保障するわ」

女生徒が俺のもとに歩み寄り、タオルを手渡す。

「…助かるっ」

タオルを受け取り、黒川の腕にあてがい、きつく押さえる。

赤黒いシミが真っ白なタオルをどんどん浸食していく。

黒川の傷は大きく、深い。恐らく何針も縫うことだろう。

それでも命には別状はないはず。俺の見立てが間違っていないければ、だが。

「はい。それじゃあ大急ぎでお願いしますね。はい」

風間を見ると、ちょうど電話を切った所だった。

同時に、沈黙していた美鳥がはっ、と顔を上げる。

「あ、あの…。私、先生呼んできます！」

「頼んだ。先に保健室な？その後職員室にも行ってくれ。保健室に誰もいなかったら体育教官室だ」

「はいっ。任せてください」
さすが俺の妹。立ちすくんでいたのは十数秒。
すぐに正気を取り戻し《できること》を行動に移す。
家では甘ったれの妹だが、実は生徒会役員に選ばれるほどしっかり者なのだ。

「救急車。十分かからないって」

「サンキユ。聞いたか？黒川、もうすぐ救急車が来るからな。もう大丈夫だ。待ってるよ」

「ありがとう…。天海先輩は…凄いな」

「…クロ？」

今にも消え入りそうな声。

力の無い、すぐにでも散ってしまいそうな音色。

「本当に…カッコいいよ…最期に、君の顔を見て…良かった」

「黒川ちゃん？」

「ねえ。もし、生まれ変わったら…」

震える右手を俺に差し出し、懇願する。

「僕を恋人にして……くれるか…な？」

俺が握り返そうとした瞬間。

黒川の腕が力を失い、落ちた。

「おい…」

瞳を閉じ、眠る様な表情。

見ようによつては笑顔にさえ見える表情。

何故。

何故だ。

どうして、どうしてこんな事になるんだ。

どうして

《死んだフリをするんだ》。

「瞼、ピクピク動いてんぞ」

「う、バレた？」

「バレないわけが無い。」

確かにかなりの出血量ではあるが、あの程度の出血で人間は死なない。

昔、安っぽい刑事ドラマを見ていた時に兄いもうとが言っていたので間違いないはずだ。

「マジで命に別状無いんだぞ。まあ、貧血くらいは起こすかもしれないけどな。病院に行くまでに出ていく血なんて、多めの献血程度だぞ」

ちなみに、ペットボトルに換算すると五百ミリボトル一本弱。洒落では済まない量だったりするのだが、黙っておく事にする。

「ちえっ。死んだら惚れてくれるかなーって思って」

「どう言う思考回路だよソレは…。死んだら恋愛も何も無いだろ」

「そう、だね。じゃあ生きる事にするよ」

「ったく、このバカ。口を開けば変な事ばっか言いやがって。もう大人しくしてろよ」

空いた手で軽く頭を小突く。

緊迫した状況だと言うのに、思わず和み、笑いが漏れてしまった。これだけ馬鹿な事が言えるなら大丈夫だ。

風間も胸をなでおろしている。

ようやく一息つけそうだった。

嘆息し、後ろを振り返る。もちろんタオルを押さえつける手は離さない。

「ありがとう。《睦さん》…だよな？」

タオルを持ってきてくれた女生徒に礼を言う。

「私の事を知っているの？話した事はないはずなのだよ」

知らないわけが無い。

隣のクラス　A組の生徒、睦紅兔^{むつみへにと}。

まるでテレビや雑誌のモデルのようなすらりとした長身。彫りの深い美貌。腰まで届く美しい金髪。

同じ人間とは思えないほどに完璧にバランスのとれた顔のパーツ。《信じられない》と言う言葉でも足りないほどの美女。

知らない方がおかしい程の有名人なのだ。

ロシアの血を多く引いているらしく、長期休みのほとんどを海外で過ごしているらしい。

「隣のクラスだしな。タオル、汚してごめんな。新しいの用意しておくからさ」

「気にしないでいいのだわ。私は当然の事をしたまでかしら」

《だわ》、《かしら》どこか使い方に違和感を感じる語尾。日本に来たのが高校入学の時らしいので、ある意味仕方ないのかもしれない。

「気にするさ。睦さんが来なければ取り返しのつかない事になってたかもしれないんだから。本当に、ありがとな」

「ふふんつ。そこまで言うなら、その感謝。受け取っておくわ」

笑顔を向け、精一杯の礼。何故か顔を赤くする睦さん。

彼女は《当然の事》をしたと言った。

少し複雑な気分だ。

周囲を見渡す。興味の色を帯びた視線が俺達に向けられている。

こいつらは、その《当然の事》すらできないんだよ。

怒りで胸が張り裂けそうになる。
周囲の野次馬に、友人を護れなかった自分の無力さに、そして、
植木鉢を落とした犯人に。

《犯人》

一つ、嫌な《想像》が頭を巡った。
当たって欲しくない考えだった。
杞憂であって欲しい。嘘であってほしい。
もし、俺の《想像》が真実だった場合…
俺のせいで、
天海慶次のせいで。

彼女は、腕にずっと残る傷を負ってしまったという事なのだから。

嫌な《想像》

それは

世界が、反転した。

真昼の空から夕暮れへ。

野次馬が遠巻きに囲む中庭から、人混みで埋まった駅のホームへ。

頭が混乱している。

俺は今まで学校にいたはずだ。

黒川が大怪我をし、救急車を待っている途中だったはずだ。

違う！

頭の中から声が聞こえる。

違う。違う。違う、と。

朦朧とする意識の中、自分の状況を確認する。

尻もちをついた俺。がくがくと震える体。何故か制服の前ボタンワイシャツが外れ、Tシャツが露出していた。

視界の端に映るのは、怯えたような瞳で俺を見る群衆。ほとんどが平坂高校うちの生徒。

そつだ。思い出した。

俺がいるのは学校では無い。駅だ。駅のホームだ。

《俺は駅のホームから突き落とされたのだ。》

おぞましい感覚。後ろからの衝撃。今でも背後に残っている。

徐々に頭がはつきりとしてきた。途端に疑問が頭の中を支配する。当然の疑問。

《ならばどうして俺は生きているのだろう》、と。

俺はホームから線路に突き落とされた。

そして、目の前と言っても良い距離に電車が迫っていた。

なのに、何故生きている。何故挽肉ミンチになっていない。どうして内臓も脳漿もぶちまけずに《無傷》なのだ。

ふと、襟首に違和感を感じる。

これは、手。手の感触。人の手だ。
誰かが俺の襟を握りしめているのだ。
違和感を確かめるため、震える体を制し振り返る。

「に…兄さん…」

「ケージいつ！」

俺を見つめる二対の瞳。涙を滲ませた二人の女。
小動物のような妹、そして活発そうな女。

「助けて、くれたのか？」

こくり、と頷く二人。

奇跡としか言いようが無かった。

恐らく、俺が突き飛ばされた瞬間に二人が手を伸ばし、引き戻してくれたのだ。

買い換えただけの制服のボタンははじけ飛んでしまったが、命と比べれば安いものだった。

「あ、ありがとう」

声はいまだに震えている。頭も、完全にははつきりしていない。
体は凍りつく様に冷え、反対に心臓は全力疾走をした後のようにどくどくと高まっている。

自分の息遣いさえ聞こえるほどに身体感覚は研ぎ澄まされているのに、頭は現実とは違う場所をゆらゆらと漂っている。
奇妙な感覚。思考が纏まらない。霧がかかったようにぼんやりとしている。

だがそれでも、たった一つ、たった一つだけ確実な事がある。

俺の腰の下に残る感覚が教えてくれている。

俺の体に、心に刻み込まれた恐怖が教えてくれている。

間違いない。

俺は、間違いない

《命を狙われている》

3・大人の対応

六月十八日 午後七時二十分 一 《平坂高校》 駅 駅員室

映像の中の男は疲れているように見えた。

平坂高校の制服を纏った長身。丁寧に整えられた黒髪。

不鮮明な映像のせいで細かい顔立ちは分からないが、映像の男は紛う事なく俺 天海慶次だった。

疲れているように見えるのも無理はない。

あのとときの俺はボロボロだったのだ。肉体的にも、精神的にも。

何も喋る気が起きなかった。口を開く気力さえなかった。

当然だ。後輩の大怪我に加え、命を狙われているかもしれない恐怖。

全ての出来事が俺の肉体を、精神を蝕んでした。

肩を落とし、うなだれている俺。両隣りには妹の美鳥と、もう一人の俺を助けてくれた女生徒。

しばらく、映像は何事もない駅のホームを映し出す。

まるで働きアリのように蠢き、列をなし、散る人の群れ。

ほとんどは帰路につく平坂高校の生徒だが、会社員らしき男女や、大学生らしき若者、他校の生徒も交じっている。

映像の中の俺は動かない。魂の無い抜け殻のように電車を待ち、佇んでいる。

だが、数秒後。

突如、人混みが蠢いた。

次の瞬間、映像の中の俺がバランスを崩し、つんのめる。

口をぽかんと開けた間抜け面をしていたことだろう。たたらを踏み、黄色い線の外側へ、そして吸い込まれるように何も無い空中へ方足を踏み出す。

がくん、と沈む右半身。

駅の外まで響き渡る、けたたましいブレーキ音。

確かに、あの時俺は《死》を覚悟した。

だが、次の瞬間。

俺の背に伸びる二つの腕。

冥界行きの穴から引きずり出される体。

ブレーキをかけながら通過していく特急電車。

驚き、後ろに下がる周囲の生徒。

密集したいたせいか将棋倒しのように尻もちをつく者もいた。

目まぐるしく回りに回る状況。

だがそれは、わずか一瞬の出来事だったのだ。

「どう考えても押されてるだろ!？」

映像が流されていたモニターを指差し、俺が叫ぶ。

《事件》の後、俺が通されたのは駅員室とも呼ぶべき場所。

教室の半分ほどの広さの部屋。

いつもはカウンター越しにしか見えない内側。

電子機器の唸るような駆動音が、外のざわめきと混じり雑音となる。

不快な雑音は俺の耳を突き、いらだちと怒りに拍車をかける。

目に映るのはいくつかの作業机、パソコン、資料棚、そして壁一

面に広がるモニター。

そして、三人の大人。

一人は《鉄道警察隊》と書かれた紫の腕章をつけた若い警察官。

もう二人は、中年の駅員だ。妹たち二人は、何故か別室に通され

て行った。

「押されたって言うけどねえ……」

歯切れの悪い口調で駅員の一人が呟く。

「俺は押されたんだよ！間違いない。嘘なんか言っていないんだ！
今でも覚えている。俺の体に与えられた衝撃を。」

二つの、《手》の感触を。

あれは《事故》なんかではない。間違いなく、《故意》なんだ。

「嘘とは言っていない。うん。君は嘘をついてない。ただ、ねえ」

まるで泣きじゃくる幼児を諭す親の様な口調。

察しの悪い俺でも分かる。

この顔は《どうやって目の前のパニックに陥った高校生を落ち着かせようかと言葉を選んでいる》と考えている。

「うーん。何て言えばいいのかなあ。そのね、えーっと」

口ごもる駅員。彼の様子を見て、警官が割って入る。

「よくあるんだ。混雑してるときにさ。人がギユウギユウ詰めだろ
う？それで押される。で、押された人は思う。『突き落とされた！』
と」

感情を排した警官の言葉。

頭が真っ白になった。

警官の言葉の意味が一瞬、分からなかった。無意味な言葉の羅列
にしか感じられなかった。

次に、真っ白になった頭が真っ赤に燃えあがった。理不尽に対す
る怒りで、不条理に対する疑問で。

警官の言葉の意味を理解した。無意味な言葉の羅列が意味をなし、
連結した。

つまり、警官たちはこう言いたいのだ。

《お前が押されたと思っているのは勘違いでしか無い》と。

「っざけんな！俺は、俺は押されたんだよ！今でもあのクソみたいな手の感触が残ってんだよ！」

感情のブレーキを失い、口汚い言葉が思わず吐きだされる。

テールに身を乗り出し、警官の顔が近付く。

それでも、警官は無表情。

「だからね。なんていうかね。気にしすぎて言うの？」

俺の激高を諷めるかのように駅員が続ける。だが、目を合わせようともしない。

俺は駅員を睨みつける。無理矢理に目を合わせる。

突き落とされたなんて信じるつもりは無いと言う意思表示。

「人が密集しているせいでビデオには押された姿は映っていない。確かに君の言う事も分かる。だが、よく見るんだ」

警官がダイヤル型のコンソールを操作し、映像を撒き戻す。

「ここ。君が《突き飛ばされる》前のシーンだ」

ダイヤルを回すのをやめ、再生ボタンを押す。

《六番乗り場》と記憶している電車の乗り場。

何故か、普段は整列しているはずの、行列のバランスが崩れていった。

「分かるかい？《列のバランスが崩れて》いるんだよ。不幸な事故だったんだ」

「…そんな馬鹿な」

「証言だって取れている。残っている生徒さん達に話を聞いたけど、君が突き落とされたように見えたって言う子はいなかったよ。全員が揃いも揃って、《誰かがぶつかってきてバランスが崩れてしまった》と発言している」

再び、コンソールをいじる警官。

映し出されたのは先ほどとは別のカメラからの映像。

携帯電話を耳に当て、人混みから離れようとする平坂高校の男子生徒が走っている。

恐らく、少しでも通話がしやすい場所に移動しようとしているのだろう。

かなりのスピードだ。全力疾走と言っても良い。人混みを避け、掻き分け、がむしゃらに走る。

だが、そこは帰宅ラッシュで賑わう駅のホーム。走っている男子生徒が六番乗り場の行列に並んでいる生徒にぶつかってしまう。

それをきっかけに綺麗に整列した行列は、分裂し混沌となる。

「こう言う事だよ。分かったかな？ 押した子にも、走っている子にも悪気はなかったんだ」

相変わらずの無表情で警官が告げる。

「《原因》になった男子生徒には厳しく注意させてもらった。自分が何をやったのか理解して反省していた。それでも君は不満か？ 《不幸な偶然》だったんだよ」

熱に犯された頭が一気に冷める。誰も、俺の話を聞いてくれない。誰も、信じてはくれない。

ぶつかった男の話は事故と信じるのに、俺の話は信じない。

俺を押しした人間の言葉は信じるのに、俺の言葉は信じない。

冷め、沈む意識。押し寄せる失望感。

「だけど、その《不幸な偶然》が、もう《四度目》なんだよ……」ビデオを見る前の聞き取りで、既に警官には説明してあった。

暴漢に襲われ、轢き逃げに遭いそうになり、植木鉢が落とされ、ホームから突き飛ばされた。

一つ一つは不運な事故だ。だが、丸一日の間にこのような《偶然》が起こる訳が無い。

確かに警官や駅員の理屈も理解できる。

カメラには明らかに偶然の事故の証拠を映し、証言と言う裏付けも取れている。

だけど、けど、それでも

「これだけ偶然が続けば必然としか思えないんだよ……。後輩だってケガしてんだ……！この事はどうやって、どうやってあんたらはどうやって説明するんだ!？」

膝の上で拳を握りしめ、訴える。

睨みつけるように、怒りを、嘆きを、全てを込めて声を絞り出す。

「うーん。確かにね、そうだよな」

しばしの思案の後、駅員の一人が漏らす。

「なあ、立花さん。被害届、書かせてあげたらどうです?」

今まで一言も喋らなかつた駅員が口を開く。

思いが通じたのだろうか。

信じて、もらえたのだろうか。

年長者二人の言葉に、困った顔をする立花と呼ばれた警官。

困った表情^{かお}。無表情だった警官が初めて見せた表情だった。

どうしてそこまで渋るか俺には全く理解できない。

それでも、俺にとっては大きな前進だった。

「じゃあ、被害届書こうか」

警官が鞆から《被害届》と書かれた紙を取り出す。

「ちゃんと聞くから、はっきりと答えるように」

睨むような目の警官。頷く俺。

これで警察に調べてもらい、犯人を捕まえてもらえる。

もう、恐れなくて大丈夫なのだ。

だが、何故か俺の胸には不安が渦巻いていた。

直後、不安は的中する。

俺は現代の司法システムの欠陥を知ることになる。

悪夢の始まり。

最低な数分間の幕開けだった。

3・大人の対応（後書き）

次回、最低な裁定。

4・現代司法の恐怖

「ちゃんと聞くから、はつきりと答えるように」

睨むような目の警官。頷く俺。

被害届、と書かれた紙を取り出す警官。

恐らく、今回の《突き落とし事件》の為に持ってきていたのだろ
う。

紙を広げ、日付を記入しながら彼はゆっくりと質問を始めた。

「まず、じゃあ君はどんな被害を受けた？肉体的、金銭的に」

最初の質問が投げかけられる。

「え…？」

だが俺は。その時点で言葉に詰まってしまう。

被害、怪我、損害、そんな物は 無かった。

強いて言えば制服二着だが、犯人によって直接破壊されたわけ
はない。

「え？じゃなくて、どんな被害を受けたのかって聞いているの」

先ほどまでの困った顔は消え、相変わらずの無表情。

被害、と言われても困る。

黒川は怪我を負ったが、俺は今まで無傷なのだ。

「あと、大人に対しては敬語。気が立ってるのは分かるけどちゃん
と使いなさい」

「…すみません。普段は使っくんすけど、ちょっと気が立ってました。
俺自身に被害はありません」

「じゃあ、目撃者とかは？君が襲われたって証明できる人はいる？」

「…いません」

嫌な予感がした。

「証言もない、被害もない、無い無い無いじゃ警察は動けない」
冷たく、突き放すような一言。
おかしい。何かがおかしい。
背筋が凍る。胸がざわめく。
まるで、無数の虫がぞわぞわと心臓を這い回っている感触。
俺は、信じてもらえたはずなのに。
だから被害届を出してもらったはずなのに。
なのに、どうして警官は否定的な事しか言わないのだ。

「なあ、天海慶次君」

初めて、警官が俺の名前を呼ぶ。
嫌な予感が、より勢いを増す。
心臓を這う虫が、口を開く。
駄目だ。それ以上は聞いてはいけない。言わせてはいけない。

「警察は、君の力になれない」

心臓を這っていた虫が一齐に牙を剥く。
物理的では無い、だが、確実な《痛み》が俺の胸を襲う。
予感的中した。
胸の中で警官の言葉が反復される。

《警察は、君の力になれない》

「強盗未遂はともかく、轢き逃げ未遂は立件できない。轢いてもいない車両を取り締まることは不可能だ。そして、今回の電車も《事故》と証明されている」

「後輩が怪我してるんだよ。なのに動かないってのか？」
「被害を受けたのは君じゃない。一度、学校と相談するべきだ」
「相談って、もしその間に何かあったらどうするんだよ!？」
「なら、君が襲われる理由を教えてほしい」
「それは…」

全く覚えが無い。覚えが無いのに襲撃は受けている。
ただ、被害が無いので警察は動かない。

考えられるのは俺が《襲われる理由》を《忘れ》てしまったこと。
八か月前の《事故》で負ってしまった《記憶障害》。そのせいで俺は様々な事を《忘れ》てしまう。

だが、その事を上手く説明出来る自信もなかったし、説明した所で警官の気が変わるとは思えなかった。

何故なら、彼は《マニユアル》に則って対応しているから。
法の番人としては正しい姿なのかもしれない。
だが、俺にとっては最低な警官だった。

「もしかしたら事件かもしれない。しかし、客観的に見ると《あまりにも不幸な偶然》としか思えない。俺はおかしい事を言っているかな？」

この瞬間、全ての違和感や疑問の謎が解けた。

警官が困った顔をしたのは、俺の証言から事件性を見出す事が出来なかったから。被害届を出し、受け取った所で実質的な捜査が行われる見込みが無いから。そのような事で無駄な仕事を増やしたくないからだ。

事務的で冷たく、攻撃的な態度を取っているのは、優しくした所で結果は変わらないからだ。

そう、彼は《全て真実と認定したうえで、不幸な事故だと断定した》のだ。

事件性は無い、と。

「我が県の犯罪発生件数は、年間約八万件。この意味は分かるか？」

ああ、分かるぞ。

あんたはこう言いたいんだろう。

「事故か事件かも分からない高校生のガキの戯言たわごとに構うより、やる
ことがたくさんある、ってか？」

「そこまでは言っていないが、力になれないと言う事だ。納得して
欲しい」

ふざけるな。

納得できるわけ無いだろう。

俺だけが狙われるならまだいい。

巻き込まれ、黒川が大怪我をしたんだ。大切な後輩が血に染まっ
たんだ。

もしかしたら、美鳥だって、他の家族だって巻き込まれるかもし
れない。

もし、そうになったら、俺には耐えられない。

助けを求める様に、脇の駅員に目を向ける。

だが、俺の瞳に映るのは困った顔をした駅員達。

そんなにばつさり切り捨てて大丈夫なんでしょうか？苦情とか来
ないでしょうか？

俺には、彼らの顔が自分の保身を案じているように見えて仕方が
無かった。

- - - - -

頭の中が空っぽだった。

何も考えたくなかったし、事実、何も考えていなかったのだろう。気づけば、俺は駅員室を出て、切符売り場に立っていた。

どうやって会話が切り上げられたか、どんな気持ちで席を立ったか。全てを事細かに覚えてはいるが、まるで他人事のようにだった。

早く帰らないといけない。

また、襲われてしまうかもしれない。

徒歩は危険だ。家族に迎えに来てもらわないといけない。

電話をかけないと。

なのに、俺の体は指一本たりとも動いてはくれなかった。力が沸かない。何もする気にならない。

「もう、こんな時間か」

視界の端に、駅に備え付けのアナログ時計が映る。

時刻は午後八時を回っていた。

突き落とされた時はまだ夕方だったのに、既に駅の外は闇に支配されていた。

学生客の多い駅前の商店街は、既にシャッターの下ろされた店が多く、僅かな街灯が照らすだけだった。

もう、何もかも考えるのが面倒くさい。

このまま、あの商店街みたいに闇に溶ければいいのに。うな垂れ、地べたにしゃがみ込む。

そうすれば少しでも闇に溶けれ、嫌なことから逃げられると思ったから。

「もう、ケージ。なにをしてるの？」

女の声が耳に入る。

俺を呼んでいると気づくには一瞬の間を要した。

「兄さん、お疲れですね。大丈夫ですか？」

顔を上げ、確認する。

俺の前には、二人の女が立っていた。

駅のホームで俺を助けてくれた二人組。

一人は、小動物の様なロングヘアの少女。

もう一人は、外に跳ねたセミロングが印象的な女。

「大丈夫だ。多分」

「大丈夫じゃないわよね、ソレ。あたし達も事情聴取されたけど、全く相手にされなかつたもん。カメラと証言が事故

を裏付けてるー！って言うけど、その前に襲われた事件が無関係な訳無いじゃないっ

「祈衣姉さんの言うとおりですよ。どうしても、って言うなら被害者を呼んで来なさい、なんて…」

「呼べるわけ無いじゃない…。あんなに怖い思いをしたのに」

ロングヘアの少女　妹の美鳥がしゅん、とうな垂れる。そして、落ち込んだ美鳥を慰めるように撫でる祈衣姉さんと呼ばれた女。

まるで、仲の良い姉妹の様だ。

姉妹でなくても、物心ついたときから仲良くしている様な

まさか。

「なあ、美鳥」

一つ、疑問を口にする。

「はい、何でしょう？」

これだけの事件に巻き込まれ、考えたくもない事実だったのだが、口にせずにはいられない疑問。

「あのさ。お前の隣にいる女の子の事だけだな」

言いたくなかった。杞憂であってほしかった。

「…!!」

「っ!!」

二人の顔が硬直する。

それは、俺の想像が当たっている事を示していた。

「その子 祈衣姉さん、だっけ？」

「もしかして…」

「兄…さん。冗談ですよ？幼馴染の、祈衣姉さんですよ…?」

この状況で冗談なんて言えるわけが無い。

聞き覚えのない名前。見覚えのない幼馴染。

答えはもう、分かりきっている。

それなのに、俺は続けてしまう。何故か、止めれなかった。

「一体、誰…なんだ？」

頭の中を《記憶障害》と言う単語が埋め尽くす。
八か月前の事故で負ってしまった脳障害。

そう、俺は。

幼馴染であるはずの彼女の事を

全く覚えていなかったのだ。

4・現代司法の恐怖 (後書き)

本当は3、4は1本にまとめるはずだったのだけど、長くなりすぎちゃいました。げふん。

次回、ケージの記憶障害の説明。コメディ編である《日常編》の人には二重に説明する事になってしまいますが。

5・記憶障害と決意

「ケージ、あたしのこと、《忘れ》ちゃったの」

重い言葉とは裏腹に、彼女の口調はあっさりしたものだった。幼馴染、と言っていた割にはドライすぎるような気がする。

「すまない。本当に、すまない」

「何でそんなに暗いのよ。ケージらしくないわよ。《忘れ》たら、思い出せばいいじゃない」

「思い…出す。そうだ。そう、だよな」
ゆっくりと深呼吸。

確かに俺は彼女の事を《忘れ》てしまった。

だが、忘れたのなら思い出せばいい。

彼女の言葉で少しだけ気力が戻る。

「まず、君の名前を覚えてほしい」

「あたしは、風間祈衣。ケージの幼馴染で、探偵よ」
「探…偵？」

日常生活では聞きなれない単語に、少々戸惑う。

高校生で、探偵。マンガやアニメじゃあるまいし、おかしい話だ
と思う。

だが、目の前の女 風間さんは冗談を言っている目では無かつた。

大きく息を吸い込み、続きの言葉を吐きだす。
それは、俺にとってあまりにも予想外な言葉。

「さ、さすが祈衣姉さんですね。私には出来ない事を平然とやつてのけるなんて」

美鳥が感嘆の声を上げる。

そこで俺はようやく理解した。

彼女は俺に覇気を与えるためにわざと奇行に出たのだ。

「……ありがとう。もう、大丈夫だ。本題に入ろう」

馬鹿話から、真剣な話題にスイッチを切り替える。

去年の秋、俺は交通事故に遭った。

スピード違反の乗用車に撥ね飛ばされ、頭を強く打ち瀕死の重傷を負ったらしい。

その後遺症で、俺は《記憶障害》に悩まされている。

「俺の、《記憶障害》」

「兄さんはその日一日で見たり、聞いたりした物を《忘れ》る。睡眠を引き金にして」

「だけど、《忘れたことば》を誰かの口から聞けば《思いだせる》。自分達に確認させるように、お互いが順番に口にする。

風間さんの事を《忘れ》ているのが嘘かのように、俺達の息はぴったりだった。

「あれ、でも兄さん。今日は眠ってないですよ。駅の時も普通に祈衣姉さんとお話してましたよ」

「多分、電車に轢かれそうになった時に意識が飛んだんだよ。聞いた事がある。人間の防衛本能で、死の恐怖に直面すると死ぬより先に意識を失う事があるって、な」

あの時、俺は確かに死を覚悟した。自分がバラバラの肉塊になる姿を想像した。

想像した痛みが現実になる前に、俺の本能は意識を失う事を選んだのだろう。

「たった一瞬でも《忘れ》るんだ。キツいね」

「もう慣れた。気にしてても始まらないからな。だけど、名前を聞いても思い出せないって事は、《巻き込まれ》てるな」

《巻き込まれる》。

頭の中で反芻する。

俺の記憶障害は、直接《忘れたことば》に強く関係した物も《忘れ》てしまうのだ。

例えば、《ミッキーマウス》と言う《ことば》を《忘れ》た場合、ミッキーマウスに関係した《デイズニー》《デイズニーランド》なども《忘れ》てしまうのだ。

それだけならまだしも、《ミッキー》が大好きで大好きでたまらない友人《が》いればそいつの事も記憶から失われていしまう。

唯一の救いは、先ほど風間さんも言っていたが《思いだせる》こと。

《忘れたことば》　この場合は《ミッキーマウス》　を文字として見たり、音声として耳に入れる事が出来れば、巻き込まれた記憶も含めて全てを思い出す事が出来るのだ。

「風間さんの名前を《忘れ》たわけじゃなければ、風間さんを強く印象付ける何かを《忘れ》たって事だよな」

「そう、なるわよね。だけど、あたしは探偵以外に特徴なんて無いわよ」

いや、探偵じゃないだろ。絶対に認めないぞ俺は。

「スタート地点で八方塞り、ですね」

「いいんじゃない？いつかきつと思いつくわよ」

あつげらかんと言い放つ風間さん。

きつと、彼女は大物か大馬鹿のどちらかだ。

「そう言う訳にもいかないだろ。もしかしたら《忘れ》た記憶の中に襲われた理由が隠れているかもしれないんだから」

被害届を書いていたときに感じた事を口にする。

もしかしたら、《忘れ》た記憶の中に狙われる理由が潜んでいるのではないかと。

《忘れ》た記憶を思い出す事が出来れば何らかの対処ができるのではないかと。

「うー。襲われた理由がメインなの？あたしの事はどうでもいいわけ？あたしとケージの命どっちが大事なのよー」

「記憶障害の人間に向かって冗談なのか本気なのか分からない発言は止めてくれ。どう返して良いのか本気で分からないから」

「ギャグよ」

「よし分かった。少し黙ろうか」

「うう。ケージが冷たい。でもさ、考えてみたんだけど、ケージが襲われた理由って一つしか無いんじゃない？」

「え？」

ふざけた発言の直後に、さらりとんでもない事を言う風間さん。思わず上ずった声で返事をしてしまう。

「うーん。でも、違うかも。もしアレだった場合、あたしも狙われてなきゃおかしいし」

「もったいぶるなよ。何か一つでもいい、手掛かりでもいいから教えてくれ」

そう、何でもいい。どんな《ことば》でもいい。

《忘れ》てしまった友人の事を思い出せるなら、襲われた理由のヒントになるなら、どんな事でも知りたい。

「大したことじゃないわよ。二週間前の事件、覚えてる？」

「二週間前…？」

「そう。ケージは、あたしと一緒に学校で死体を発見したの」

ぞわり、と体に鳥肌が立つのを感じる。

死体？そんな馬鹿な。全く覚えていない。

呆然とする俺を見て風間さんがにやりと笑う。

「きつと、ケージが《忘れ》てるのはそれね」

俺が、学校で死体を発見した事を忘れている？

冗談みたいな話だ。ありえない。どうせさっきの様なギャグに決まっている。

そのはずだ。

美鳥の顔を見る。「そんなマンガみたいな話がある訳無いじゃないですか」と言ってくれることを期待して。

だが、

「兄さん。本当です。兄さんは二週間前、学校の音楽室で死体を発見しています」

美鳥の放った言葉は、あまりにも現実離れた出来事を真実と認めていた。

ただ、問題は《音楽室》と言う単語も俺の記憶にはないのだが。

恐らく、《死体を発見した事件》に関係があるから《忘れ》てしまったのだろう。

語感から、音楽の授業を行う教室と推測する。

「死体を見つけたせいで、狙われてるって言うのか？」

「かもしれない、っただけよ。だって、一緒に発見したあたしは何もされずにケージだけ襲われるなんておかしいじゃない」

確かに、彼女の言う通りだ。

一緒に死体を発見して、俺だけ狙われているのは説明がつかない。「それでも、もしかしたらって事がある。もっと詳しく教えてほしい」

その《死体》の話が《風間祈衣》の記憶に繋がる可能性は高い。

俺が狙われる理由も大切だが、何より《友人》の事を忘れたまま

でいる事が何倍も辛かった。

「と、言っても大したことないわよ。放課後の音楽室に行ったら首吊り死体があった。それだけだし」

「それだけ……って、十分オオゴトだろ、それ。首吊りって事は、自殺なのか？」

「うん。事件。二、三日で犯人は捕まったけど」

事件。殺人事件だろうか。

学校に殺人犯がいた。吐き気がする様な気持ち悪い話だ。

俺の表情を見てとったのか、風間さんが努めて明るい声で告げる。

「違うわよ。殺人じゃないの。事故死なの」

風間さんが事件の概要について説明を始める。

事件が起きたのは、六月四日の放課後。

定期テスト前で殆どの部活は停止状態。

人気のない学校の屋上で、3-Aに属する三人がある《度胸試しのゲーム》にいそしんでいた。

A組は特進コースと呼ばれる難関大学や学部を目指す優等生の集まり。

三人も他聞に洩れず、とびきりの優等生。おそらく、ストレスもあつたのだろうが、彼らの行っていた《ゲーム》は過激なものだった。

《命綱をつないで、屋上のフェンスの外側でレースをする》

正確にはレースではなく、タイムアタックらしいがそんなことはどうでもいい。

命綱をつけて、安全にスリルが味わえる。

彼らにとっては受験と、優等生というレッテルによる重圧から解

放される唯一の瞬間だったらしい。

彼らはその《ゲーム》にハマっていた。

だが、そこで事故が起きた。

三人のうちの一人が落下してしまったのだ。

命綱がある、と安心していたのも一瞬。彼はその命綱に首を取られて落下してしまう。

痛みは、無かっただろう。首の骨を折り、即死だったらしい。

「それで、怖くなったんでしょうね。残った二人　高森君と保志君って言うんだけど、《偽装》したのよ」

「そんな、まさか…。そんな死人に対して冒涇みたいな行為…！」
「あと半年で受験。いい大学に入って、良い企業に就職する。当たり前の未来が壊れていくのが我慢できなかったんじゃないかな。あたしには理解できないけどね」

偽装。《犯人》の二人は被害者を音楽室に運び、天井から吊るした。自殺に見えるように。

「だけど、警察にはそんな素人の偽装は通じなかったの。見破ったのはケージのお兄さんなのよ？」

「兄…？」

「あつ。事件に関係してるんだからお兄さんの事も《忘れ》てるのね。お兄さんは検視医なの」

明るく振る舞う風間さんだが、俺の気分は更に沈んでしまう。
友人だけでなく家族も忘れてしまっているのか、俺は。

初めての経験と言う訳でもないが、それでも胸が罪悪感で締め付けられる感覚がした。

「けど、そのお陰でケージが何を《忘れ》たのか、絞れてきたわよ」

「ほ、本当ですかっ？」

今まで黙っていた美鳥が歓喜の声を上げる。

「ええ、本当よ。名探偵を舐めないで」

風間さんが美鳥に向かってVサイン。不敵な笑みを浮かべている。

「今までの聞き取りから、ケージが《忘れたことば》は、《音楽室》《梶原君の死体》《あたし》《お兄さん》に関する事。これら全ての条件を満たす《ことば》と考えられるわ」

まさか、本当に彼女は名探偵だったとでも言うのだろうか。にわかには信じられないが、ほんの十数分で俺の《忘れたことば》に辿りついたと断言するのだから、信じるしかない。

「ケージが忘れた《ことば》 それは」

「ごくり、と唾を呑む。」

ほんの一瞬の間の筈なのに、何分間にも感じるほどに時間が引き延ばされた感覚。

世界がスローモーションになった気がした。

ゆっくり、ゆっくりと風間さんが口を開く。

息が漏れ、声が届く。

「梶原正明、高森一郎、保志ヒロシ、この三人の誰かの名前よ！事件の被害者と加害者のねっ」

びしり、と俺を指差し、高らかに宣言する風間さん。

その声には、魔力とも言っていいほどの力と説得力があった。

だが、

「あれ？」

俺には何の反応もない。

記憶を取り戻すどころか、三人の名前すら覚えが無い。

「ちがつ…た？」

「違うな」

六月も下旬に差し掛かると言うのに、寒い、寒い沈黙が支配した。

真冬のシベリアの様に凍えた空気が俺達を包む。
気のせいか、枯葉が舞っている気がした。

「あれー？おかしいわね」

「おかしいのはお前の思考回路だよ。その三人は俺の兄とか風間さんとは関係あるのか？」

これまでの情報から、《忘れたことは》は、《音楽室の事件》と《風間祈衣》と《俺の兄》に関係していなければならぬ。被害者達三人は、後ろ二つの条件を満たしていないのだ。

「うーん。言われてみれば確かに。けど、絶対にあの《死体遺棄事件》と関係してると思うのよ」

「《死体遺棄…事件》…？」

心臓が止まったかのような感覚。

次の瞬間、俺の頭の芯に疾る疼き。

「って、あれ？もしかして…」

「大丈夫ですかっ。兄さん！」

二人の心配する声が、まるでどこか違う世界からのように遠くから聞こえる。

疼きは痺れへと変わり、頭の芯から全体へと浸食していく。

そして、痺れが痛み変わり、

痛みは《記憶》へと姿を変えた。

バラバラになった記憶の欠片ピースが渦を巻き、頭の中をかき回す。

昼間の学校。

植木鉢が落ちる直前。黒川が怪我をする寸前の記憶が再生される。

「それ、本当？」

昨夜、二度も命の危機に遭遇したと告白した俺に対し、信じられない、と言った表情の風間さん。

「嘘を言っただろうするんだよ。マジで死ぬかと思ったんだ」
言い返す俺。

「これは事件の予感ね。今度こそあたしの…高校生探偵の定番よっ
風間さんが高らかに宣言する。

そうだ、彼女は　こいつは、いつもこんな突拍子もない事を言うんだ。

「二週間前の…《死体遺棄事件》のリベンジよっ！」

そう、だ。

死体遺棄、事件。

俺が《忘れたことば》それは　《死体遺棄事件》だ。
《ことば》を認識した瞬間。バラバラだったパズルのピースは急速に組み立てられ、はつきりとした《記憶》に形成される。

音楽部ぶがくで向かった音楽室。

生まれて初めて見た本当の《死体》。

首がヘシ折れ、虚ろな目で俺を見ていたあの視線。

あまりの恐怖におびえる俺。くだらない冗談で、恐怖から解き放つてくれた自称名探偵。

相談に乗ってくれた優しい兄。

全て、全て思い出した。

「もう、大丈夫だ」

急激に引いていく頭痛の波を感じながら告げる。

「なら、兄さん」

「思い出したのね？」

ああ、思い出した

《風間祈衣》

彼女は、自称名探偵で、自称幼馴染で、記憶障害を負った今でも親身に接してくれる

かけがえのない

《友人》だ。

「ああ。だからさ、もう無理して明るくしなくて大丈夫だぞ」

「え…？」

俺は知っている。覚えている。

死体を発見した時、襲撃に不安を感じていた時、記憶を失い怯えていた時。

俺の精神が不安定な時、彼女がいつも馬鹿な事を言って元気を与えてくれる事を。

「いつも、迷惑掛けて悪い。こう見えても感謝してるんだぜ？」

「殊勝な態度はケージらしくないわよ？」

「うるさい。たまにはいいだろ。風間には世話になってるしな、一応だよ。一応」

「あれ、照れてるんですかー？兄さん」

顔を赤くする俺。からかう風間と妹。

記憶が戻り、全てが元通りになったのだ。

いや

まだだ。

まだ、《襲撃》の謎は解明されていない。

俺は何度も命の危機に陥り、後輩の黒川が大きな傷を負った。

警察は動かないし、動けない。

問題は山積み。危機は一つも去っていない。

どんな時でも、俺を心配し、勇気づけてくれる自称探偵の姿を見て、思う。

まるで主人を見失った子犬の様な不安げな瞳で俺を見つめる妹を見て、思う。

もし、再び彼女たちが巻き込まれたら、と。

次に巻き込まれるのは風間や美鳥かもしれない。

後輩の腕から溢れ出る血が、痛みに悶える顔が、赤黒く染まった制服が、鉄錆の様な鮮血の臭いが再生される。

次に黒川に何かあったら、彼女は本当に命を失ってしまうかもしれない。

友人や、家族を失う。吐き気さえ感じる想像だった。

記憶障害で日常生活を送るのもギリギリな俺を、明日には彼女たちの事を《忘れ》ているかもしれない俺を見捨てないで付き合ってくれる連中を失う。

そんな事に俺は耐えられない。

頭の中で一つの《意思》が煙を上げ、くすぶっている。

その《意思》を実行する事は、あまりにも危険で、常識外れで、馬鹿みたいだと普段なら笑い飛ばすことだろう。

恐怖はある。迷いもある。

逃げ出せるならすぐにも逃げ出したいし、投げだせるならすぐにも投げ出したい。

たかだか素人の、記憶障害持ちの高校生に何ができるのかとも思う。

それでも、覚悟をするしかなかった。

俺がやらなければ、大切な家族が、友人が巻き込まれ、傷つき、失われるかもしれないのだから。

そう、俺の中でくすぶる意思、それは。

《犯人に立ち向かう》こと。

犯人を見つけ出し、自らが行った襲撃を認めさせる。

俺達に二度と手だしが出来ないように。

俺の心の中の何か小さな火を放ち、燃え始めているような、そんな気がした。

5・記憶障害と決意（後書き）

くそ長い。

しめんなさいしめんなさいしめんなさい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5490z/>

CAGE - 籠の中の記憶探偵 - 《事件編》

2011年12月30日00時51分発行